◎聖徳太子（574 - 622）の直筆本

『法華義疏（ほっけぎしょ）巻四』五百弟子授記品第八

①「その時、五百の羅漢」より以下は、第二に、記を得たる人の領解（りょうげ）を明かす。

また長行と偈（げ）有り。長行の中に就（つ）いて二有り。

② 第一に、法説を挙げて、略して領解す。

第二に、譬（たとえ）を挙げて、広く領解す。第一の法説は見るべし。

ただ第二の譬説（ひせつ）に就いて、即ち、開と合と有り。

③ 開譬（かいひ）の中に五つの譬（たとえ）有り。

第一に、名づけて、**繫珠（けじゅ）の譬**と為す。即ち、上（かみ）の化城（けじょう）の中の、第一の導師の譬を領す。

④ 第二に、「その人、酔い臥して、自（みずか）ら覚知せず」の二句は、名づけて、

**自ら覚知せずの譬**と為す。

上の化城の中の、第二の懈退（けたい）の譬を領す。

⑤ 第三に、「起き已（おわ）りて遊行して」より以下は、名づけて、**他国に行くの譬**

と為す。

上の「化城」の中の、第三の「化城を設（もう）くるの譬」を領す。

⑥ 第四に、「後に於（おい）て親友が」より以下は、名づけて、

**親友相（あい）値（あ）うの譬**と為す。

上の「化城」の中の、第四の「止息を知るの譬」を領す。

⑦ 第五に、「而（しか）してこの言（ことば）を作（な）す」より以下は、名づけて、

**宝珠を示すの譬**と為す。

上の「化城」の中の、第五の「将に宝所に至らんとすの譬」を領す。

⑧「譬えば人有りて…如し」とは、即ち、下根人自ら己れが身を譬う。

⑨「親友の家に至りて」とは、親友十六王子を譬え、家は三界を譬う。

言うこころは、聖人（しょうにん）は、化処（けしょ）を以て、家と為すなり。

⑩「酒に酔いて臥す」とは、**五濁八苦**を以て、為（ため）に惛（くら）むを譬う。

●五濁（ごじょく）：この世が悪くなるときの五つの汚濁の相。天災・疫病・戦争などが起こる

**劫 (こう) 濁**、誤った考え方がはびこる**見濁**、衆生 (しゅじょう) の寿命が短くなる**命 (みょう) 濁**、煩悩によって悪が蔓延する**煩悩濁**、衆生の資質や果報が低下劣悪となる**衆生濁**。

⑪「この時親友は官事にて行くに当りて」とは、化縁（けえん）既に尽きて、他方を化する

に就くを譬う。

⑫「無賈（むげ）の宝珠（ほうじゅ）を以て、於衣の裏に繫（つ）け、之（これ）を与えて去る」とは、大乗を無賈の宝珠に譬う。

⑬ 言うこころは、十六王［子］は、為に大乗を説き、後（のち）、他方を化するに就くなり。

⑭**「衣の裏」とは、大乗の信を譬う**。

而して、**体信を亡壊（ぼうえ）すること能わざる故に、「衣の裏に繫け」と言う**。

⑮ 問うて曰く、「若し、親友に家に至りて酔うと言わば、これ則ち、親友が酒を与えて

酔わしむるなり。內合も、また然（しか）り。則ち、これ十六王子が衆生に五濁八苦を

与えて惛（くら）ましむるや。」

⑯ 釈して曰く、「聖人云何（いかん）ぞ、煩悩の縁を作らん。ただこの文は、少し倒（さかさ）

にして、応に『人有りて、酒に酔うて、親友の家に至りて臥す』と言うべし。」

⑰ 問うて曰く、「衆生と十六王子とは、皆三界を以て家と為す。則ち、この衆生は、

何（いずこ）より来るが故に、『来り至る』と云うや。」

⑱ 答えて曰く、「王子と衆生とは、一家（いっけ）を共にすと雖（いえど）も、王子は

既に化主（けしゅ）たり。自（おのずから）ら家主に当たる。

⑲ 故に則ち衆生は、義として自ら来ると成す。故に親友の家に来り至ると云うなり。

若し、流れ来るの義を以てするも、また得（う）べし。」

⑳ また問う、「既に『衆生は、五濁八苦を以て為にその大機を障（さ）ゆ。故に、大乗を

以て化を為すことを得ず』と云えり。則ち、義は、酒を以て、その正志を乱さるるが故に、

珠を繫くるを為さざるが如し。

㉑ 而るに、若し、この文の如くならば、その酔える時に当ありて、而（しか）も繫く。

若し、しからば、五濁八苦を以て、惛（くら）まさるる時に当たって、為に大乗を説くや。」

㉒ 釈して曰く、五濁八苦は、若し、聖に登るに非ざれば、なんぞ絶無なることを得ん。

ただ或いは、動と不動との義有り。酒に酔うこと、或いは甚しく、或いは可なるが如し。

㉓ 珠を繫くる時に当たりて、。酔うと雖も、なお可なり。

故に為に繫くることを得たり。內合するも、また然り。

衆生が五濁に動ぜざる時に、為に説くなり。

㉔ 一に云く、また可なり。珠を繫くる時に当たって、正しく、これ珠なりとの信無く、

ただ物を繫くるとの信有り。これに因りて、為に繫くるなり。

內合するも、また然り。

㉕ 時に正しく大信無く、ただ楽欲（ぎょうよく）の信あり。これに因りて為に説くなり。

好しとせば、則ち、好し。

㉖ ただ上来説く所の「大機を発する故に、為に大乗を説く」の旨（むね）に違す。

㉗ 一に云く、また可なり。その酔う時に当たっては、すべて一信も無し。

而れども、なお為に繫くるは、後に利あるが為の故なり。

後に利すべき為とは、即ち、これ大乗の機を発するなり。

㉘ 即ち問う、若し、しからば、今日もまた応に信無かるべし。

然れば則ち、**展転（てんてん）窮まり無し**。何れの時にか信を成ぜん。

㉙ 釈して曰く、**何ぞ、信を成ずること無からん**。

或いは、一説に因りて信じ、或いは、二三説にて成ず。或いは無数を須（もち）いて成ず。

㉚ 衆生の神根、各（おのおの）異なり、解悟（げご）同じにあらず。

㉛ 所以に**聖人、機に随って、為に説くこと、また窮まり無きなり**。

この家（け）は、未来の善を以て、教えを感ずるものなり。

㉜「この人酔い臥して、すべて覚知せず」とは、第二に、**自ら知らざるの譬**なり。

上の第二の懈退（けたい）の譬を領す。

㉝ 言うこころは、大機なき故に、大乗を以て化を為すを得ざるなり。

珠を繫くるの時に当たっては、酔うと雖も、なお可なり。

ただ酔うて臥すること久しき故に、忘れて知らざるなり。

㉞ 內合すれば、五濁八苦の起こり動くこと久しき故に、**その大信を忘るるなり**。

㉟「起き已りて遊行して」より以下は、第三に、**他国に遊ぶの譬**なり。

上の「化城」の中の、第三の化城を設くるを領す。

言うこころは、三乗を以て化するを得るなり。

㊱ 中に就いて二つあり。第一は、**親友は酔いより起きて行くを見るの譬**と名づく。

如来は、衆生が少［小の誤字］乗の機を発すを見る。

上の「化城」に、導師が衆の所楽（ねがい）を知ると云うを領す。

㊲ 第二に、「若し少しく」より以下は、**少を得て足れりと為すの譬**と名づく。

三乗の人、三乗を受けて、足れりと為す。

上の「化城」に、衆人（もろびと）が化城を受くと云えるを領す。

㊳「起き已りて遊行して」とは、言うこころは、酒いまだ醒めずと雖も、理として、

永く臥するにあらざる故に、起きて行くなり。

㊴ 內合すれば、衆生は大機なしと雖も、理として永く迷うにあらざる故に、

また三乗の機を発（おこ）すなり。

㊵「他国に到る」とは、**今その本の大乗の解（げ）を失いて**、将（まさ）に三乗教の中に

入らんとすること、他国に到るが如し。

㊶「衣食の為の故に、勤力（つとめて）、求索（もと）むること甚（はなは）だ大いに

艱難（かんなん）せり」とは、二果を得んと欲するが為に、**四諦及び十二因**の義を

勤修（ごんしゅ）するなり。

●四諦（したい）：迷いと悟りの両方にわたって因と果とを明らかにした四つの真理。

苦諦・集諦 (じったい) ・滅諦・道諦。

㊷ ここに至る以前は、上の「化城」に汝等（なんじら）愍（あわ）れむべし、

云何（いかん）ぞ大珍宝を捨てて、退き還らんと欲する」と云えるを領す。

㊸「若し少しく得る所あれば、便ち以て足れりと為す」とは、二乗が少分を得て、

足れりと為すことを明かす。即ち、上の「化城」に、「我等は今この悪道を免れて、

**已（すで）に度せりの想いを生じ、安穏の想いを生ず**」と云えるを領す。

㊹「後に於て、親友が会い遇（お）うて之（これ）を見る」とは、第四に、

**親友相（あい）値（あ）うの譬**と名づく。

上の「化城」の、第四の「止息を知るの譬」を領す。

㊺ 言うこころは、如来が、大機を発すを見るなり。

上には、「この諸の人衆（ひとびと）既に止息することを得て、復た疲倦（つかれ）なし」

と云えり。

㊻「而してこの言（ことば）を作す」より以下は、第五に、名づけて、**珠を示すの譬**

と為す。

上の「化城」の中の、第五の「将に宝所に至らんとする譬」を領す。

㊼ 言うこころは、為に**今日の法華**を説くなり。上には、「即ち化城を滅して、

衆人（ひとびと）に語りて言う、『汝等（なんじら）、去来（いざ）や、宝所は近きに在り。

向者（さき）の大城は、我が化作（けさ）せし所なり』」と云えり。

㊽ 中に就いて、三つあり。第一に、「何ぞ、衣食の為に、乃ちかくの如くに至るや」とは、

**それ少を求むるを非す**。即ち、上に云「向者（さき）の大城は、我が化作せし所なり」

と云えるを領す。

㊾ 第二に、「我昔」より以下は、**それ本を忘るるを非し**、為に正しく示す。

即ち、上の「汝等、去来（いざ）や、宝所は近きに在あり」を領す。

㊿ 第三に、「汝今」より以下、義を以て、**今の一を修せよと勧むる**ことを領す。